

B2-5

学習者の現実の文脈とシナリオ文脈の「ずれ」を見つけ出すために

Data analysis to find out gaps between students' actual context and the scenario context

竹岡 篤永, 根本 淳子, 喜多 敏博, 鈴木 克明

Atsue TAKEOKA, Junko NEMOTO, Toshihiro KITA, Katsuaki SUZUKI

熊本大学大学院 教授システム学専攻

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

要約：現実的な文脈設定での経験を通じて学ぶGBS（ゴールベースシナリオ）型学習が新しい方法として実践されている。本研究は、GBSの一つであるSCC（ストーリー中心カリキュラム）を題材に、主に社会人学生がGBSのメリットをより享受するための仕組み作りを目的とする。第一段階としてSCC学習者の書き込みデータを分析した結果、学習者文脈と設定間の業務スタイル・業務内容の近接度を着眼点として得ることができた。

キーワード：ストーリー中心カリキュラム（SCC）、GBS、シナリオ、社会人教育

1. 研究の背景と目的

やさしいことから難しいことへ順序立てた説明なのにどうもうまく頭に入らない。あるいは、説明は理解できるけれど、どうすればそれを自分自身の課題と結びつけられるのかが見えない、というような経験はないだろうか。わたしたちは、学習内容を自分の文脈と照らし合わせながら、経験として学ぶ。しかし、学習カリキュラムは学習者の文脈に沿うというより、どちらかと言えば、一般性、専門的分化、論理的形式化という特徴を備えている（デューイ 1998）。つまり、このような実感は、学習カリキュラムと学習者の学びの実情のずれから生じていると言えるのではないか。

このようなずれを解決する一つの方法として、GBS（シナリオによる学習）がある。GBSとは「現実的な文脈の中で『失敗することにより学ぶ』経験を擬似的に与えるための学習環境として物語を構築するための理論」（根本、鈴木 2005）であり、すでに多数のGBSが行われている（根本ら 2011）。

熊本大学教授システム学専攻では、GBSの一つであるSCCを提供している。ほとんどが社会人であるという学習者の文脈をいかしながら、多角的・実践的にeラーニングが学べるように設計されている。学習者にはeラーニング開発会社に中途採用された社員という役割が与えられ、教材設計・eラーニングシステム操作・知的財産権の調査など多岐にわたるタスク（各科目の小さな課題）への取り組みを通じて、部長からの業務命令（使命）を達成していく。SCCは、学習内容を、学習者にとって「す

に有意義な位置を占めている何かに結びつけること」（田中 2009）によって、学習カリキュラムと学習者の学びの実情のずれを埋めようとするインターフェイスであると考えられるだろう。

しかし、実際にSCCで学習をした筆者の一人は、ペースメーカーとしては有用であったものの、シナリオの文脈をうまく学習に役立てられなかったという感想を持った。また、「タスクと使命達成がうまくリンクさせられなかった」「役割を忘れていた」などの声もあった。このような「ずれ」は、どういう要因で生じたのだろうか。さらに、どのような仕組みをプラスすれば、シナリオ型学習による学びが深まっていくのだろうか。本研究は、後者を目的とし、その第一段階として、学習者のSCCへの感想・意見についての分析結果を報告する。また、今後引き続き、学習者へアンケート・インタビューを行い、学びを深める具体的な仕組みを検討していく。

2. 分析対象データと分析方法

学習者はSCCを通じて、eラーニングの基礎となる5つ科目を学ぶと同時に、シナリオ型カリキュラムの設計手法そのものを学ぶ。そのため、学習者は、科目終了毎にSCCの役立ちややりがい具合などについてのリフレクションが求められる。学習者が実際にどのような「ずれ」を感じているのかを探るため、このリフレクションデータ（書き込み）を取り上げた。

対象としたデータは、筆者の一人が学習を行った年度のデータである。5つの科目終了毎に、10～16人が行った255の書き込みを分析した。また、分

析においては、SCC 設定が学習内容へのインターフェイスの役割を果たすことから、学習内容をどのように意識したかに着目した。ストーリーに関わりなく学習を進めたのか、ストーリーに入り込んで学習したのか、である。そこでまず、書き込みデータを3つに分類した。学習内容を外側から眺める（パターン1）、ストーリーに入り込んで学習（パターン3）、そしてその中間（パターン2）である。その後、学習者別にデータを見ていった。

3. 分析結果

(1) パターン別の書き込み詳細

パターン1に分類した書き込みは、「SCCでの学習の進め方が業務の進め方の参考になると感じています」「LMSの特徴をより深く考察することにつながったと思います」など、主に自分の現行業務にいかせる部分を挙げたものや、自分自身の業務を見つめ直したものである。

パターン2としたものは、「全体の進捗管理としてSCCの流れを利用する」「部長に報告するビジネス文書なんだ、と思うと、スラスラ(?)書ける私です」など、SCCの文脈を積極的に活用している書き込みと、「タスクが、SCCの業務なのか、科目の学習なのか、それは地続きなのか、頭を切り替えてやるべきなのか、混乱していました」「ビジネスの分野が違ふとまったく想像もできないので、部長に確かなレポートを送ることができたかどうかは定かではありません」など、SCC文脈がうまく活用できなかったという書き込みである。

パターン3は、「事例が提示され、それへの対応策を検討するという課題はやりがいがありました」など、SCC文脈で与えられた使命そのものへのやりがいについて言及したものである。

(2) リフレクション毎・パターン別の詳細

(1)で分類した書き込みについて、学習者別(A~Nの14人)にリフレクション毎・パターン別に描いたのが図1である。

横軸にとったリフレクション1~5は、異なった科目内容に対するものであるため、時間の推移だけを表すものではないが、これを学習者毎のパターンの推移として見てみると、学習が進むに従って、パターン1(外側から眺める)に移行する学習者(A・E・H・J・M・N)と、どの時点でもほぼパターン2(出たり入ったり)であった学習者(B・C・G)に大別できた。リフレクション毎の学習者の分布を見ると、導入部分には、パターン2が多かった。

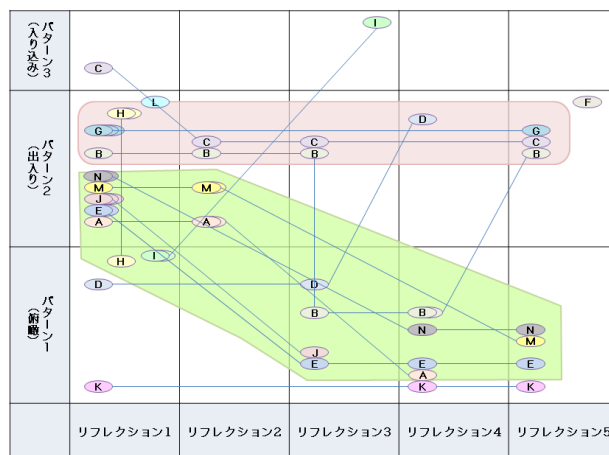


図1 リフレクション毎・パターン別の学習者分布

4. 考察とまとめ

SCC 文脈を自分自身の業務スタイルと絡めて捉え、「進捗管理」や「学習の切り口」として活用する場面があった一方で、学習内容と自分自身の業務内容がかけ離れている場合は、SCCの設定そのものに「混乱」を感じたと考えられる。そして、現実の業務に役立つという観点からリフレクションしていくようになったのではないだろうか。現実業務を抱えている社会人学生がSCCのような設定で学習を行う場合、自分自身の業務と与えられた設定との類似点を探りながら学習を行うことは、ごく自然なことなのだろう。

しかし、類似点が見いだせなかった場合、そもそも類似する業務を抱えていない学習者がいた場合に、SCCを最大限機能させるためにはどうすればよいのだろうか。今後は、他年度SCC学習者に対象を広げ、業務スタイルと業務内容とに分けて調査を行い、具体的な機能強化(アドオン)につなげていく予定である。

参考文献

- (1) J. デューイ (1998) 『学校と社会・子どもとカリキュラム』, 講談社, 東京
- (2) 根本淳子・鈴木克明 (2005) ゴールベースシナリオ (GBS) 理論の適応度チェックリストの開発, 日本教育工学会論文誌 29(3), 309-318
- (3) 根本淳子・朴恵一・北村隆始・鈴木克明 (2011) 問題解決型学習デザインの研究動向—GBSとSCCを中心に—, 日本教育工学会研究論文集 10-5, 151-158
- (4) 田中智志 (2009) 4章カリキュラム—どのように構成するべきか『キーワード 現代の教育学』, 東京大学出版会, 東京